

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2470501392		
法人名	合資会社三重福祉会		
事業所名	グループホーム安東苑		
所在地	津市安東町2004		
自己評価作成日	令和元年 6 月 20 日	評価結果市町提出日	令和元年10月14日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhyou_detail_022_kihon=true&JigovsvoCd=2470501392-00&ServiceCd=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	令和 元年 7 月 16 日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「人生の半分は自分の(時間)の為に、後の半分は人(社会)の為に」の母体の理念を念頭におき、ボランティア精神を大事にして利用者職員がいつも笑顔であるように「笑う門には福来る」を目標に掲げている。事業所の行事やイベント、運営推進会議、地区の防災訓練の参加などで地域との交流を図っている。主治医と連携しながら、看護師とスタッフ全員チームワークで本人や家族の希望に添って看取りケアも実践している。生活保護や地域のボランティアも受け入れており、職員は明るくチームワークを大事にし離職率も低く安定した介護を行っている。また、利用者の思いや意向の把握をする為、「ケア会議」など行い利用者の思いを引き出している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設15年目の事業所は、津市西郊地区、安濃川流域の田園地帯に立地し、のどかな環境の中で利用者がゆったりとした日々を過ごせるように支援する事を特色としている。利用者職員が「安東苑会議」で話し合い、利用者中心の生活とケアの実践を志している。東西に2ユニットの建物で、中央の渡り廊下とホールを経てユニット間を行き来する利用者の表情は生き活きとして自由に暮らしている様子が伺える。母体グループは複数の高齢者事業を展開し、基本姿勢として市町と連携し、困っている人を積極的に受け入れて地域貢献を果たす実践をしている。また苑長を含め3名の看護師を中心に、協力医との連携を密にして看取りケアを提供し、昨年2名対応した。職員は地元出身者が殆どで定着し、利用者のため、自分のためにやりがいを持って業務に取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業者の理念を念頭におき目のつく所へ提示している。安東苑の理念「笑う門のは福来る」も毎年、干支の絵と共に目のつく所へ提示し笑顔が見られる職場にしたいと心掛けている。	理念としてボランティア精神と余裕を持って業務に携わり、笑顔で利用者に接することを心掛けている。業務上のストレスを軽減するために複数の医療職と介護士が連携をしてチームワークを良好にし、職員の離職者が少ないことは理念の実践の証である。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の一員として自覚を持ち地域の防災訓練の参加、ごみ収集所の掃除、喫茶店の利用、運営推進会議、夏祭り等で地域の方と交流している近所の方より不要になった日用品を頂いている。	近隣住民と散歩の際に挨拶を交わし、野菜や不用品等を頂いている。事業所の夏祭りは毎年地域住民と交流の場とし、利用者と共に案内状をポスティングし、当日参加者との交流を楽しんでいる。また、最寄りの喫茶店は利用者の憩いの場として活用している。住民のボランティア活動として毎週食事や入浴の世話を受け入れている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議への出席、地域のボランティアの方を受け入れ理解してもらう様に努力している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回、運営推進会議を開催し行事報告など意見を交換している。会議での意見は職員全員で共有している。	運営推進会議は奇数月に開会し、地域より自治会長・民生委員・防災訓練指導センター・市介護保険課・包括支援センター職員等が出席して、行事や活動報告とタイムリーな議題を提案し意見を交わしている。家族の参加を得るために方策を検討中である。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に参加してもらい意見を積極的に伝えている。現在生活保護の方が2名いる。	開設以来、市町福祉課・介護保険課・援護課と連携を密にして、低所得等困っている人を積極的に受け入れている。安濃総合支所に近く、管理者は関係機関の窓口に向いて認定更新代行やおむつ給付や生活保護による扶助等の相談を行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止宣言をし月1回の会議、毎日の申し送り職員共有している。安全を考え門扉の施錠はしているが日中は玄関の施錠はしておらず自由に出入り出来る様になっている。	毎月「ケア会議」を開会し、職員よりヒヤリハットと事故報告を受け、対応策を検討している。グループ全体の代表者会議に管理者が毎月出席し、3ヶ月に1回は身体拘束適正化委員会を開会している。身体拘束廃止に関する職員研修会は年間2回企画し、第1回は6月に実施した。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	講習に参加し月1回の会議で議題に出し認識を高め虐待を見過ごさない様、注意を払っている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度については現在活用されている方はいないが今後必要としている方もいるので活用を視野に入れ努力している		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	書類を用いて十分な説明を行っている。疑問質問はその都度対応している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎日の申し送りで利用者の意見を見出し検討している。利用者や家族が気軽に意見、要望を出せる様な雰囲気作りを心掛けている。	2ヶ月に1回、利用者と職員が出席の基「安東苑会議」を開会し、利用者が自由に意見や要望を出し話し合っている。家族から職員による通院介助の要望があり、急変時や家族が対応困難な際と年2回の定期健診の際には職員が通院介助を行っている。	運営推進会議に家族の出席が困難で、運営に関する家族の意見や要望を伺う機会が殆ど無いため、夏祭り等の家族が多く参加する機会を通じて、職員がインタビュー方式でアンケートを実施する等家族の意見や要望を伺う方策を検討し実行することを期待する。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回の職員の検討会、グループの代表者会議、日常の仕事の中でも気軽に話し合える雰囲気を大切にしている。	職員は、ケア会議・検討会・日々の申し送り等で意見や要望を述べているが、日頃管理者も現場でスタッフの一員として共に業務をしているため、職員はその都度意見や要望を管理者に伝え、全職員で検討を要する内容は管理者が会議で提案している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	検討会で意見を聞き入れ、シフト作成時には職員の希望を取り入れている。昇給時の自己評価を行い職員からのアピールを見てもらっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修資料を提示し研修を受ける機会を確保し、声かけを行いステップアップをしていく体制意識づけの向上に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループ内のインターネットでそれぞれの施設の取り組みを見て参考にしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	契約前に要望や不安を聞き本人、家族と面談し安心の確保をする為の関係作りに努めている入所後は職員と情報を共有している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	契約前に施設見学、面談を行い家族の不安、要望を話し合い受け入れている。入所後は面会時や電話で本人の様子を報告している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	契約までに本人、家族と面談し必要としている支援を見極めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	畑の土作り、田植え等教えてもらい一緒にしている。利用者主体の安東苑会議を開いて要望を聞き応じられる様にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の面会、外出も積極的に支援している。3ヶ月に1回スナップ入りの季刊誌を発行している。行事参加の声かけも面会時やハガキで行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの方の場所の情報を聞き面会時はゆっくり話ができる空間を提供している。家族の協力で外出、外食、外泊等されている。	個々の利用者の生活歴等をアセスメント記録や日常会話、「安東苑会議」等を通じて職員は情報を得、共有化している。家族の協力を得て盆正の帰省や墓参りに外出する利用者もいる。共通の馴染みの場である高田本山のお七夜に皆で参拝し、昔を回想して話が尽きない。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合う利用者同士が安心して関わりあえる様に食事席も考慮し、時に職員から話題を提供しより良い関係が作れる様に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス利用終了後もその家族がスタッフとして働いていたり家族の紹介で入居されている。サービスが終了した家族からのアドバイスなどを参考にしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	毎日のさりげない会話、表情、行動などカルテに記載し毎日の申し送り、ケア会議で意見を交換し共有している。	個別の利用者の思いや意向は、主にソファでくつろいでいる時や、浴室で個別に入浴介助をしている時、夜勤でマンツーマンで話が聴ける時等に把握することが多い。「安東苑会議」で聴くこともある。個別ファイルに記録し、申し送りやケア会議を通じて職員間で共有化している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人、家族からの情報を元に今までの生活環境、サービス利用の把握を行っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人の意思を尊重し生活リズムに合わせた生活ができる様に支援している。毎日の申し送り、ケア会議を利用し職員の意見交換、その方の状態を把握し共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族の要望を聞き職員で話し合い介護計画作成に反映している。それぞれの利用者を担当する職員を決めて担当者中心に介護記録を元にケア会議を行い意見を出し合っている。	本人・家族の意向や要望を基に、介護支援専門員が介護計画を作成し、その日対応した職員が、サービス内容が実行できたか否か毎日モニタリングを実施し、支援経過に記録している。担当制で6ヶ月毎に担当者が課題をまとめ、ケアプラン作成会議で計画の見直しを実施している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録、カルテを利用し本人の状態、思いを職員全体で共有している。記録した物はケア会議にて担当者が分析、総括している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	受診、往診、外出など必要に応じて支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	防災訓練、救急法など行い安全に暮らしていく支援をしている。ヤクルトさんの訪問販売も利用している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人、家族の希望によりかかりつけ医を受診したり2週間に1回の協力医の往診の利用もある。適切な医療を受けられる様に支援している。	現在1名の利用者が従来のかかりつけ医へ家族の協力の下通院している。協力医は最寄りのクリニック医師で、殆どの利用者が掛かり2週間に1回訪問診療を受けている。歯科医院は事業所の前にあり通院受診をしている。3名の看護師を中心にスムーズな受診支援を行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	2名の看護師、週1回の看護師が日々の状態を把握し、相談、受診を行い支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	家族連絡、病院付き添い、看護サマリを利用し情報提供している。病院の看護師とのカンファレンスも行い情報支援、相談に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に本人、家族の意向を同意書に添って説明し意向を職員で情報交換し、その方が安らかに最期を迎えられる様に支援している。	3名の看護師が配置され、協力医と24時間連携し、深夜の往診も可能であるため利用者の急変時や重篤化にもスムーズな医療対応が可能で家族の安心の拠り所となっている。本人・家族の希望で看取り介護をチームで提供し、過去に10名以上対応している。職員は実体験豊富で十分に心得ているが、「死にゆく過程」や「入居者の状態に応じた対応例」を基に学習している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	地域の防災コーディネーターの人に来てもらい救急救命法の訓練を受けている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域の防災訓練の参加、消防署協力での避難訓練や消火器使用方法、緊急連絡網を使って災害時を想定した訓練を行っている。	今年度は4月と9月に防災訓練を実施予定である。(4月は実施済)職員は地元在住者が多く、緊急連絡網発信後15分以内に全員が集合可能である。運営推進会議には毎回地域の防災訓練指導センターの職員が出席していて、有事の際の協力関係を構築している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	まず家族なら自分ならと思い人生の先輩として敬意している。排泄時の声かけは耳元で行いバスタオルをかけるなど配慮している。	職員は、常に利用者を人生の先輩であり、人として尊重することを念頭に置き、羞恥心を与えたり、侮辱するような言動を発しないように心掛けている。例えば、介護用の食食用エプロンは使用せずに、割烹着を着用するように配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で会話、表情から思いや希望を引き出し自己決定出来る様にしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	1人、1人のペースで過ごしてもらえる様に支援している。希望に沿って生活出来る様に職員で工夫している。居室へテレビを設置されてる方もいる		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	爪、髭が伸びていないか気を配り、正月には和装、夏祭りには浴衣を希望される方に着てもらっている。2ヶ月に1回ボランティアカットを受け入れている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は利用者と職員が同じ物を一緒に時間に食べている。地域の寿司の出前も取り入れたりし食事を楽しんでもらっている。	委託業者が作成した献立に基づいて材料が配達され、事業所の職員が調理をしている。職員も利用者と同じ物を一緒に食べて、会話をしながら食事が楽しめるように支援している。餅つき・恵方巻・花見弁当・流しそうめん等、年中の行事食は利用者と共に作り、楽しんで食事をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食材は栄養管理された業者より届けてもらい水分量は個人に合わせて支援している。その方に応じて普通食、刻み、ミキサー、粥にしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	朝、夕、食事後の歯磨きの声かけ、義歯の洗浄を行っている。地域の歯医者者の利用などをし定期健診などを行っている方もいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	伝える事が難しい方には行動、表情に気付きトイレでの自然排泄が出来る様支援している。	現在、布パンツ着用者は3名で、他はリハビリパンツやパットを着用し、職員が機会を見計らってトイレへ誘い、トイレでの排泄を支援している。11月に病院から退院し入居した利用者は、体力の回復と共にトイレでの排泄を支援し、リハビリパンツから布パンツに変更できた。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取、ヤクルトなど本人の希望を取り入れている。主治医と相談しその方に合った便秘薬を服用している方もいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	最低限、週3回を基本とし入居者に合わせ一般入浴、リフト浴を使い分け安全に入浴出来る様に支援している。入浴チェック表を利用し日を変えて全員入浴出来る様に支援し入浴出来ない方は清拭の方をさせてもらっている。	月・水・金と週に3日を入浴日とし、その内1人の利用者は週に2日は入浴機会が持てるように配慮をしている。入浴を拒む利用者には、声掛けを工夫したり、入浴剤を変えて誘う等入浴が出来るように支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その方に合ったペースで過ごしてもらい居室の温度、換気など気をくばり安心して睡眠が出来る様に支援している。本人希望で眠薬を服用されている方もいる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬チェック表を活用し臨時薬や薬が変更になった場合など服用後状態をカルテに記載し何かあれば看護師や主治医に相談している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	1人、1人の能力に応じて家事などしてもらっている。お酒や嗜好品の提供、園芸が好きな方には畑仕事などしてもらい気分転換してもらっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	希望があれば買い物に出かけ花見等、季節に応じて外出している。年1回のバス旅行など家族と共に参加される方もおられ支援を行っている。	畑で野菜を作り、本日はきゅうり・なす・かぼちゃ・トマトを収穫し皆で喜び合った。また、付近の公園へ散歩に行き、田園風景の移ろいを体感している。時々最寄りの喫茶店へ行き、お茶を飲み、気分転換を図っている。毎年日帰りバス旅行を企画し、今年5月に京都映画村へ行き、利用者・家族・職員25名が参加して共に楽しく過ごした。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	こちらで管理をしているが自己管理され財布を持たれる利用者もいる。買い物など本人で支払いをされている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	苑の電話を利用してもらっている。携帯電話を持ち利用されてる方もいる。年賀状を書かれ家族へ送られている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の絵や入居者の方が植えた季節の花やスタッフが持ってきてくれた花を飾り居心地良く過ごせる様に工夫している。	両ユニットの中央に渡り廊下と大ホールがあり、利用者は行き来し互いに交流を楽しんでいる。昼食後、利用者は各ユニットのホールでソファに腰掛けてテレビを観たり、会話をしてくつろいでいる。廊下に3ヶ所の洗面所があり、衛生面にも配慮し、壁面には利用者の作品、写真等が掲示されて、居心地よく過ごせる工夫がなされていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファ等を置き、気の合う人同士で会話をしたりテレビを観たり珈琲を飲まれたりされ過ごされる。食事席など希望を聞き配慮し良い関係で居られる様に支援している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	今まで使い慣れた家具、置物、家族写真、テレビ等を持ってきてもらい居心地良く過ごしてもらっている。	居室の壁面に広いクローゼットが設置され、整理整頓されている。レンタルの介護用ベッドと、利用者が自宅から馴染みの寝具や家具、作品等を持ち込み、各室が個性的で居心地良く過ごせるように工夫がされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	介護用トイレ、手すり、リフト浴があり居室のドアには表札や本人のお気に入りの飾り物を架けたり工夫している。通路には余計な物を置かず机や椅子の配置にも気を配っている。		